

□災害復興とボランティア

特定非営利活動法人レスキューストックヤード

代表理事 栗田 暢之

1. はじめに

災害時のボランティア活動といえば、水害後の泥だしや家屋の清掃、地震時の炊き出しや避難所のケアといった災害直後の活動がイメージされる。それは1995年阪神・淡路大震災で「ボランティア元年」と叫ばれ、137万人もの人々が被災地に駆けつけたことに端を発し、以降も災害救助法が適用されるような大規模災害の現場には、必ずボランティアの姿があり、もはや災害救援にボランティアは不可欠な存在として定着したからである。さらにその数は、一被災地域に何千人、何万人にも上り、文字通り災害大国の名を欲しいままに自然災害が相次いで発生する昨今にあつて、とても頼もしく、重要な存在であるということは誰もが認めるところである。

ただし、この視点は「支援する側」の論理である。「支援される側」つまり、被災者にとって見れば、とりあえずの泥だしであり、急場しのぎの炊き出しである。むしろ、多くのボランティアが去った後の復興期と呼ばれる時間の方が圧倒的に長いのである。この時期のボランティア活動は、マスコミ報

道の影響もあつてか、被災地の風化と正比例して世間の伝聞からは聴こえにくくなるが、「祭りの後」もなお残る被災地の数々の課題に目を向け、地道でも支援・交流を続け、場合によっては災害前よりももっと活気ある地域づくりの担い手として、脈々とボランティアが活動している現場もある。このように被災地支援を「点」ではなく、「線」や「面」で見つめ続けることも、今後のボランティアに必要な視点ではないか。

2. 2008年「岩手・宮城内陸地震」

(1) 耕英地区(宮城県栗原市)

先日6月13日・14日と宮城県栗原市を訪れた。被災した地区の住民らで構成する「くりこま耕英震災復興の会」が主催する地震から2年の式典にご招待いただいたのである。この地区は、経営者の妻と長男、宿泊客や従業員ら7名の方が土石流により倒壊した「駒の湯温泉」があった地域である。式典では2年の節目にあわせて遺族や地域が協力して建立した慰霊碑の除幕式もあつた。遺族を代表して、旅館経営者の菅原孝さ

ん(88)の次男、昭夫さん(55)が挨拶をされた。「地震は忘れたくても忘れられない。無力感、罪悪感、喪失感と失望の中、毎日を過ごすのが精一杯だった」「しかし、何かの形で温泉を復活させたい。何より父が再び湯に入りたがっているから。」

と語られた。

一方、会場となった慰霊碑の建立場所に続く坂道には、延々とろうそくが並べられた。鎮魂の灯だ。その中になぜか、昔懐かしいランプも置かれていた。

栗原市栗駒町耕英地区は戦後の満州の引揚者による開墾の歴史にさかのぼる。現地で1世と呼ばれる最初の開拓者は血のにじむような思いで荒地を耕し続け、やがて誕生する2世を育てながら、イチゴや大根、花卉を栽培し、さらにイワナの養殖にも全国で始めて成功させた。こうした名産を育むこの地区は、特に紅葉の時期には身動きがとれないほど混み合う栗駒山の観光客の

満足を一手に引き受けていた。戦後から60余年。現在は3世が跡継ぎとして軌道にのりかかろうとしていた。その時、あの地震が襲ってきた。

行政の避難指示により、全住民がヘリコプターで「麓」へ降ろされた。住民の生命を守るためにはきわめて妥当な判断であろう。しかし、一方で避難指示の継続は、最盛期のイチゴの収穫をあきらめること、そしてイワナを放っておくこと、つまり住民の死活問題に関わる大問題なのである。

「何とかならないものか」と、私が所属する震災がつなぐ全国ネットワークや日本災害復興学会の有志とともに初めて被災地を訪れたのが地震から10日後のことである。冒頭で触れた急務をしのぐ支援としては、当法人のスタッフらを地震翌日から派遣し、受入拠点となった栗原市社会福祉協議会を通じての支援活動はすでに行っていた。しかしこの問題は今までの支援の枠組みでは



右奥から土石流が流れ込んだ。残された2本の木のあたりが旅館玄関付近

簡単に解決できるものではない。そこで、まずは「被災者交流会」と題して、被災者からの不安や課題に傾聴したり、復興にかかる法制度の解説や過去の被災地の事例などを紹介する車座トークを開催した。当時の被災者の言葉が今も鮮明にのこる。「地震の瞬間は助かったと思った。しかし今は生き地獄だ。イチゴが出荷できないということは収入はゼロだということ」(60代男性・2世)。「山に帰りたいが帰れない。帰れないと仕事ができない。仕事がないと家族を養えない。貯金はだんだん減っている。イワナの養殖はあきらめて新しい仕事を見つけるしかないのか…。本当に苦しい。」(30代男性・3世)

こうした被災者の苦悩に少しでも元気になっていただこうと、2004年新潟県中越地震や2007年能登半島地震の被災者に現地入りしていただいた。自身の被災経験や復興への応援を語っていただき、その後の交流会ではともに涙を流したり、がっちり握手されている被災者同士の姿を、こちらももらい泣きしながらしかと見た。辛かっただろう、苦しかっただろうと思う。その後も、2回目の被災者交流集会や、震災がつなぐ全国ネットワークの加盟団体である「とちぎボランティアネットワーク」や「ハートネットふくしま」ら有志のボランティアが毎週末のように通い続け、2009年3月までは空き家を借りて支援活動の拠点とし、毎週日曜日をカレーの日として夕食を振る

舞った。また仮設住宅を訪問したり、暮れの餅つきをしたりと、ボランティアならではの寄り添い活動に尽力した。一方で、日本災害復興学会復興支援委員会では、この地

区の住民自らが「自分たちの今後の街づくりのビジョンを考えたい」というたくましい要望に応じて、住民自身がまとめた「復興計画書」の作成に、何十回と足を運び、膝を突き合わせた。

さて、式典後の懇親会では、地区のお母ちゃんたちがこしらえた盛り沢山の手づくり料理に舌鼓し、豊富に準備された酒を久しぶりに飲み交わすことになった。お互いの再会だけでもうれしいが、この時間帯こそを心待ちにしていたので、話は延々と続いた。

ある2世が私の隣に座り、並々と注いでくれながら、「今日は原点に戻る日だ。」と切り出した。酔っていても顔つきは真剣である。「1世はこの荒地を焼畑から始めた。

だからその時使っていたランプを持参したんだ」と。慰霊碑近くに並べられたランプにはこんな意味が込められていたのだ。

「地震後ははっきりいって自殺も考えた。それほど辛かった。でも俺がふさぎ込めば、1世はもっとショックを受ける。」「(地震前までこの地の水を汲み上げて販売していた)DHCが何度もうらやましがった。

これほどいい水はないと。その水で育つイワナは日本一だ。だから歯を食いしばってがんばってきた。今日は再出発の日だ」と。

涙がこみ上げてきた。

今度は「本当に苦しい…」と胸の内を吐露してくれた3世が、見違えるような笑顔で握手を求めてきた。「あの頃の自分が一番萎えていた。でも中越地震で被災した方から『ピンチをチャンスに』という言葉をいただき元気をもらった。さらにそれまで顔も知らなかった全国のボランティアさんが、

こんな僕たちを親身に励ましてくれた。そして地域の仲間が最後の最後まで応援してくれた。まだ収入は地震前の半分にも満たないが、でもこれからです。もう大丈夫です」と。また涙がこみ上げてきた。

式典の冒頭でくりこま耕英震災復興の会の会長・大場浩徳さんが「地震で山も家も田畑もみんな壊れた。でも人と人との絆は壊れなかった」との言葉が、本当に胸に染み入った。

(2) 花山地区(宮城県栗原市)

一方、同じ栗原市でも耕英地区のように「着実」とは言えない地区がある。旧花山村の栗原市花山地区である。山の崩落が著しく、現在も1世帯に避難指示が続き、大規模な修復工事が続いている地区である。

こちらでも地元住民が主体となって花山震災復興の会が設立されたが、その担い手不足が深刻である。この地域は、地震前は31世帯あったが、現在は10世帯に激減している。現在は離れた場所の仮設住宅で暮らしている方が戻っても15世帯、つまり半減するというのだ。さらに息子たちはとうも昔に便利のいいまちに出ている。残されたのは高齢者ばかりである。耕英をうらやましいと思う気持ちと、耕英のように色々取り組みたい気持ちが交錯するが、何かを提案すれば結局は言いだしっぺが一から十までしなければならない。「疲れた」というのが本音である。

しかし、生まれ育ったふるさとを思う気持ちは耕英と何ら変わらない。都会とは違い、時間がゆっくり流れ、米や野菜も自分たちで作る「豊かな暮らし」を続けていきたい。

できればじいちゃん・ばあちゃんが活躍できる何かしらの場があり、ちょっと収入も得られるような復興策はないものか、と思案をめぐらしている。「とりあえず、外部支援者も交えて車座談義でもしますか。」と提案したところ、ぜひしたいとの即答であった。「地区で会合を開いてもいつも同じ顔ぶれ。先日も15人ほど集まったが、半分は行政関係者。このような状態を続けてもいいアイデアは出てこない」と。

3. 復興とは何か?

復興とは、道路が修復されたり、新しい施設ができるといったことだけではなく、まさしく人が暮らすさまざまな環境や条件が戻り、さらに地震前よりもっといいまちにしていこうという歩み全体を指すのだと思う。途中挫折があったり、先行きが見えない場面も当然出る。また過去の事例を持ってきても、災害は地域によって異なり、一つとして同じ顔はない。それでも、地域が主体となって、一人ひとりの意見に丁寧に耳を傾け、多種多様な出会いも大切にし、所管する行政ともよく相談をしながら、時間をかけて「地域の特性に見合ったまちづくり」を進めていくこと、ここに郷土愛と地域愛は不可欠であろう。栗原市での支援活動に携わった者として、まさにこうした愛や絆がさらに育まれる現場に立ち会えたことは「ボランティア冥利」につきる。またこのことを全国の仲間に伝え、引き続きの応援を募ったり、今度は地元の減災・防災活動に生の事例として活かしていくことも必要である。

4. 災害ボランティアへの期待

本稿はたまたま直近の地震災害である事例を取り上げたが、過去にも阪神・淡路大震災で復興住宅で暮らす89歳のおばあちゃんに対する本当の孫になったようなお付き合いは15年に及ぶ。2004年新潟県中越地震で応援したある地域からは、その翌年から収穫できるようになったコシヒカリを10tずつ、あいち生協を通じて販路を確保している。2007年能登半島地震で応援した穴水町の商店街では様々な復興メニューにお付き合いし続けている。また今年で10年を迎える東海豪雨水害は、地元ということもあ

り、より多くの市民が参加できる企画を準備中である。

災害ボランティアがあの一時期支援したという「点」の支援だけではなく、しっかりと被災地の課題に向き合い、息長く応援し続けることで、地域=土の人が持つ「行き詰まり感」や「閉鎖性」に、外からの風を吹き込む役割もある。災害現場に携わったすべてのボランティアが、たまにでもいいのもう少し長く、そして深く関わることを提案したい。それは被災地のためではなく、私たち自身のためであり、この学びは必ず次の災害で生かされると思うからである。